１　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。　　〈千葉大〉二〇二一年度出題

　①子供の頃、大人が「個性」という言葉を安易に使うのが大嫌いだった。

　確か中学生くらいのころ、急に学校の先生が一斉に「個性」という言葉を使い始めたというアキオクがある。今まで私たちを扱いやすいように、平均化しようとしていた人たちが、急になぜ？　という気持ちと、その言葉を使っているときの、気持ちのよさそうな様子がとても薄気味悪かった。全校集会では「個性を大事にしよう」と若い男の先生が大きな声で演説した。「ちょうどいい、大人が喜ぶくらいの」個性的な絵や作文が褒められたり、評価されたりするようになった。「さあ、怖がらないで、みんなももっと個性を出しなさい！」と言わんばかりだった。そして、本当に異質なもの、異常性を感じさせるものは、今まで通り静かに排除されていた。

　当時の私は、「個性」とは、「大人たちにとって気持ちがいい、想像がつく範囲の、ちょうどいい、素敵な特徴を見せてください！」という意味の言葉なのだな、と思った。私は（多くの思春期の子供がそうであるように）くその言葉を使い、一方で本当の異物はあっさりと排除する大人に対して、「大人の会議で決まった変な思い付きは迷惑だなあ。また大人たちがイ厄介なことを言い出したなあ」と思っていた。平凡さを求められたほうが、それを演じればいいのだから、私にとってはずっとましだったのだ。「（大人が喜ぶ、きちんと上手に『人間』ができる人のプラスアルファとしての、ちょうどいい）個性」という言葉のなんだか恐ろしい、薄気味の悪い印象は、大人になった今も残っている。

　大人になってしばらくして、「多様性」という言葉があちこちから、少しずつ、聞こえてくるようになった。

　最初にその言葉を聞いたとき、感じたのは、心地よさと理想的な光景だった。例えば、オフィスで、様々な人種の人や、ハンデがある人、病気を抱えている人などが、お互いのことを理解しあって一緒に働いている光景。または、仲間同士の集まりで、それぞれいろいろな意味でのマジョリティー、マイノリティーの人たちが、互いの考え方を理解しあって、そこにいるすべての人の価値観がすべてナチュラルに受け入れられている空間。発想がウヒンコンな私が思い浮かべるのは、それくらいだった。

　それがえばいいという気持ちはずっとある。けれど、私は、「多様性」という言葉をまだ口にしたことがほとんどない。たぶん、その言葉の本当の意味を自分はわかっていないと感じているからだと思う。その言葉を使って、気持ちよくなるのが怖いのだと思う。私はとても愚かなので、そういう、なんとなく良さそうで気持ちがいいものに、すぐにみ込まれてしまう。だから、「自分にとって気持ちがいい多様性」が怖い。「自分にとって気持ちが悪い多様性」が何なのか、ちゃんと自分の中でエ克明に言語化されてり着くまで、その言葉を使って快楽に浸るのが怖い。そして、自分にとって都合が悪く、絶望的に気持ちが悪い「多様性」のこともきちんと考えられるようになるまで、その言葉を使う権利は自分にはない、とどこかで思っている。

　こんなふうにオシンチョウになるのは、私自身が、「②気持ちのいい多様性」というものに関連して、一つ、罪を背負っているからだ。

　私は子供の頃から、異常といっていいほど内気な子供だった。とても神経質で気が弱く、幼稚園で他の子供に怒鳴られただけですぐに泣き、幼稚園の先生も両親も、この子はきちんと小学校に通えるのだろうか、と不安がっていたのをよく覚えている。学校に行くと、担任の先生が言った。

　「あなたが泣き虫の村田さんね。話は幼稚園の先生から聞いてるわよ。あなたの席はここ。先生のそばのここの椅子に座ってね」

　そのとき、自分が異物であるということを、初対面の先生がもう知っているということがとても怖かった。よく考えればそれは、カカビンな私に対して学校が柔軟に対応してくれていたのだと思うが、当時の私は、これ以上異物であることが周りの子供たちにばれたら、自分は迫害されると思った。私は、周りのしゃべり方、行動、リアクションを、自分の心の中に違和感がない範囲で、トレースするようになった。みんなが笑っているところでは笑った。みんなが怒っているとき、あまり賛同できない場合には、曖昧な困った顔をした。トレースすることで、いかに自分が平凡な人間かということを、発信し続けた。枠をはみ出したら、この世界を追われて、いつか殺される。に聞こえるだろうが、当時の私は、それくらい真剣に思い詰めていた。

　大人になってもその癖は続いた。だから、私の古くからの友人や、学生時代の仲間などは、私を「おとなしい無害な人」だと思っている。その枠をはみ出すことは、私にとってとてつもない恐怖だったから、私は決してぼろを出さなかったのだ。

　大人になってだいぶ経って、たくさんの友人に出会い、私を取り巻く世界の価値観は急に変わった。相手の奇妙さを愛する、という意味で、「狂ってる」という言葉が飛び交うようになった。

　それは、迫害ではなく〔　　Ａ　　〕の言葉だった。その言葉は、いつも〔　　Ｂ　　〕と一緒に渡された。○○ちゃんのこんなところが変で、大好き。△△さんのこんな不思議な行動が、愛おしい。みんな狂ってる、だからみんな愛おしい、大好き。そんな言葉が交わされるようになった。

　私はそこで、初めて、異物のまま、お互い異物として、誰かと言葉を交わしたり、愛情を伝え合ったりするようになった。それがどれだけうれしいことだったか、キゲンコウ用紙が何枚あっても説明することができない。今まで殺していた自分の一部分を、「狂っていて、本当に愛おしい、大好き」と言ってくれる人が、自分の人生に突如、何人も現れたことが、どれほどの救いだったか。夜寝る前に、幸福感で泣くことすらあった。平凡にならなくてはと、自分の変わった精神世界をナイフで切り落とそうとしながら生きてきた私は、本当はその不思議で奇妙な部分を嫌いではなく大切に思っていたのだとやっと理解できたのだった。同じように、誰かの奇妙な部分を好きだと、素直に伝えられるようになった。

　そういうあたたかい、愛情深い世界は、わかりやすく見えないだけで本当はずっと遠くまで存在しているのではないかと、った気持ちを持つようになった。

　そうした日々の中で、私は、「多様性」という言葉で自分をし、私と同じように、「奇妙さ」を殺しながら生きている人を、深く傷つけてしまったのだった。

　誤解なく伝えられるよう願っているが、あるときから、メディアの中で、私に「クレージーさやか」というあだ名がつくようになった。それは、最初は友人のラジオの中で、愛情あるおりの延長線上で出てきた言葉だった。だから、最初、私はうれしかった。

　けれど、だんだんとそれが、単なる私のキャッチフレーズとして独り歩きするようになった。ある日、テレビに出たとき、そのフレーズをキャッチコピーのように使うことを、私はいいことだと思ってク許諾してしまった。多様性があって、いろいろな人が受容されるのは、とても素敵なことなのではないかと思ったのだ。

　そのとき、私という人間は、人間ではなくキャラクターになった。瓶に入れられ、わかりやすいラベルが貼られた。テレビに出ると、そのフレーズがテロップになり流れるようになった。私は馬鹿なので、最初はそのことが誰かを傷つけていることに気が付かなかった。

　「村田さんがお友達に『クレージー』と言われているのは、村田さんが愛されてるのを感じて、私までうれしいのですが、テレビやインターネットでそう呼ばれているのを見ると、とてもつらく、苦しい気持ちになります」

　文面や詳細は違うが、私の元に、何通か、このような手紙が届いた。理由は様々で、「村田さんと自分は似ていると感じるからかもしれませんが、自分が言われているような気持ちになります」という方もいれば、「村田さんのことを知らない人に村田さんが笑われているのを見るのが、残酷な構造を見ているようでつらいです」という方もいた。「村田さんはどう思っていらっしゃいますか？」という、心のこもった、丁寧な質問に、私はまだ返事を書くことができていない。

　Ｘ笑われて、キャラクター化されて、ラベリングされること。Ｙ奇妙な人を奇妙なまま愛し、多様性を認めること。この二つは、ものすごく相反することのはずなのに、馬鹿な私には区別がつかないときがあった。

　「村田さん、今は普通だけれど、③テレビに出たらちゃんとクレージーにできますか？」

　深夜の番組の打ち合わせでプロデューサーさんにそう言われたとき、あ、やっぱり、これは安全な場所から異物をキャラクター化して安心するという形の、受容に見せかけたラベリングであり、排除なのだ、と気が付いた。そして、自分がそれを多様性と勘違いをして広めたことにも。

　私は、そのことをずっと恥じている。この罪を、自分は一生背負っていくことになるのだと思う。私は子供の頃、「個性」という言葉の薄気味悪さに傷ついていた。それなのに、「多様性」という言葉の気持ちよさに負けて、自分と同じ苦しみを抱える人を傷つけた。

　私には「一生背負っていこう」と思う罪がいくつもあるが、これは、本当に重く、そしてどう償っていいのかわからない一つだ。

　④どうか、もっと私がついていけないくらい、私があまりの気持ち悪さに吐き気を催すくらい、世界の多様化が進んでいきますように。今、私はそう願っている。何度もを繰り返し、考え続け、自分を裁き続けることができますように。「多様性」とは、私にとって、そんな祈りを含んだ言葉になっている。

（村田沙耶香「気持ちよさという罪」による）

問１　傍線部ア～クの、漢字をひらがなに、カタカナを漢字にせよ。

問２　傍線部①「子供の頃、大人が「個性」という言葉を安易に使うのが大嫌いだった」とあるが、これはなぜか。「異物」という語を必ず用いて説明せよ。

問３　傍線部②「気持ちのいい多様性」とあるが、筆者はこのような「多様性」が実現すれば、それはどのような状態であると考えていたか。「～状態」につながるように、傍線部②より前の本文中から二十八字で抜き出し、最初と最後の四字で答えよ。

問４　空欄〔　　Ａ　　〕および〔　　Ｂ　　〕に入るものとして最も適切な語を本文中から探し、それぞれ漢字二字で答えよ。

問５　傍線部Ｘ「笑われて、キャラクター化されて、ラベリングされること」および傍線部Ｙ「奇妙な人を奇妙なまま愛し、多様性を認めること」とあるが、前者と後者の違いについて、「前者が～のに対し、後者は～である」という形で説明せよ。

問６　傍線部③「テレビに出たらちゃんとクレージーにできますか？」とある

が、これはどのようなことを意図した発言か。「ちゃんと」という表現の

意味が明確になるように説明せよ。

◎問７　傍線部④「どうか、もっと私がついていけないくらい、私があまりの気持ち悪さに吐き気を催すくらい、世界の多様化が進んでいきますように」とあるが、ここに言う「世界の多様化」とはどのようなことか、説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　ア＝記憶　　イ＝やっかい　　ウ＝貧困　　エ＝こくめい　　オ＝慎重

　　　カ＝過敏　　キ＝原稿　　　　ク＝きょだく

問２　Ａ大人の言う個性とは、大人たちにとって気持ちのよい、彼らの想像を超えない範囲での無難なものであり、Ｂ安易にこの言葉を使って自分たちに都合のよい個性を求めつつ、一方でＣ本当の異物はあっさり排除しようとする大人の姿勢に Ｄ薄気味悪さと恐ろしさを感じたから。

「異物」という語を用いていなければ、全体０。

Ａ＝３〔Ｂの要素になっている「自分たちに都合のよい」でも可。〕

Ｂ＝２

Ｃ＝３〔「あっさり」「容易く」がなければ減点１。〕

Ｄ＝２〔「恐ろしさ」はなくてもよい。〕

問３　すべての～れている

問４　Ａ＝受容　　Ｂ＝愛情

問５　前者が、Ａ奇妙に見える他者を、安全な場所からわかりやすい形で自分たちとは違うと決めつけ、馬鹿にするための排除行動であるのに対し、後者は、Ｂ奇妙さをその人らしさとして受容し、愛すべき一人の人間としてその存在を無条件で認めようとする愛情表現である。

問いの形式を守っていないと全体０。

Ａ＝５〔「キャラクター」「ラベリング」という言葉をそのまま用いている場合は減点３。〕

Ｂ＝５〔「奇妙な人をそのまま受け入れる」という内容は必須。〕

問６　番組の本番では、Ａありのままの自然体で出演するのではなく、Ｂ視聴者が求めているような普通とは異なる奇妙な人間を、Ｃ面白おかしくきちんと演じてほしいという意図。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝２

Ｂ＝４〔「視聴者が求めているような」という内容は必須。〕

Ｃ＝４

問７　Ａ誰かにとって都合よく仕組まれた、見せかけだけで結局は異物を巧妙に排除しようとする表面的な多様化ではなく、Ｂ異物に対して強烈な違和感を感じたり、自己嫌悪の念に駆られたりしながらも、Ｃ異物を排除することなくそのまま受け入れ、互いの存在をありのままに認めようとする、真の意味での多様化。

Ｃがなければ全体０。

Ａ＝３〔「誰かにとって都合よく仕組まれた」はなくてもよい。〕

Ｂ＝３

Ｃ＝４〔「異物をそのまま受け入れる」という内容は必須。〕